

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520142
 研究課題名（和文） 異人/犯罪表象をめぐる近世初期英国の宗教的・世俗的言説間の照応関係についての研究
 研究課題名（英文） Criminal Representations and Otherness in Early Modern English Discourses
 研究代表者
 境野 直樹（SAKAINO NAOKI）
 岩手大学・教育学部・教授
 研究者番号：90187005

研究成果の概要：

犯罪の詳細を描くパンフレットなどの近代初期英国の活字ジャーナリズムは、演劇作品ばかりでなく宗教関係の言説とも相互に共鳴しあうことで、信仰に関する罪（Sin）と人間相互の交渉における罪（crime）のアナロジー/相互浸透の効果を生起させる。これが外部性・他者の表象と出会うとき、差別・排除の言説はより強固な理論武装を施されることになる。このプロセスを、16, 7 世紀英国の緒言説間の共鳴を手がかりに研究した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	500,000	0	500,000
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ルネサンス 他者表象 英国演劇

1. 研究開始当初の背景

イギリス・ルネサンス期における宗教的、世俗的パンフレット、演劇作品などさまざまな言説に頻出する「異人」の表象が、相互にどのように影響し合っているかを調べることで、近世英国演劇（およびその受容史）を再考する視点をもちたいとかがえた。

トマス・ミドルトン、トマス・デカーなど、パンフレットを書き、かつ演劇作品も著している作家達は、当然ながらジャンルを横断するにあたり、レトリックを使い回している。

このうち、「他者・異人」に関係する表現の伝統がどこからくるのか、すなわち異人はどう文化的に「発見」「創造」され「表象」されてきたのかという問題を考察することが、近世ヨーロッパの異人にたいする民族的・文化的スタンスの確立に重要な影響をもつという着想を得た。

2. 研究の目的

2-1.

いわゆる 'travel plays' の系譜に連なる近世初期の演劇には、しばしば黒人、イスラ

ム教徒、新世界の先住民、ジプシーそして重要なことにユダヤ人など、ヨーロッパキリスト教文化圏に所属する者からは「異人」とみなされる人物達が登場する。多くの喜劇の場合、そうした「異人」はなんらかの新しい価値基準を「旧世界」に持ち込む存在として、いわばある種の *deus ex machina* として扱われるのだが、一部の作品（とりわけ悲劇）においては他者性は排除の口実ともなる。犯罪者の手口について 'black letter' で印刷された世俗パンフレットで繰り返し紹介され、ついにはホリンシェッドにも収録された 'pedlers' French' と呼ばれる犯罪者たちの隠語は、そうした犯罪者が（たとえ本当は英国人であっても）共同体の外部から侵入する「他者」であることを強調することで、防衛、排除のための結束を共同体に促す機能をもつ。ほぼ同時期に、教会での説教をふくむさまざまな言説において、こうした「異人」を犯罪と関係づける記述がヒステリックなまでに頻出した状況を徹視的、すなわち言説間の形式、内容、レトリックにいたる多様なせめぎあいのレベルで考察すれば、犯罪と異人を結ぶ共同体の暴力的集団幻想のメカニズムを解明できるだろう。そこで大きく以下の2点の問題に絞り込んで研究することとした。

(1) 演劇テキストとそれを取り巻く宗教的・世俗的諸文献（コンテキスト）との影響関係の方向性（どちらがどちらに影響されているか、など）の整理。先行テキストと演劇作品、およびその影響を直接的に受けたものと曲解されて創作当初とは別のありかたで社会に受容されてきた諸テキストの再評価。特に 'black letter' (English 体) と 'white letter' (Roman 体) の推移と世俗パンフレットの成立事情など。

(2) 上記1の作業の結果得られた情報を基にして、諸テキストのリゾーム状の連続性がいかに「異人差別」の方向性へと収斂して行くのか、そのダイナミクスを、宗教的 / 世俗的文献、絵画、バラッドなどの諸テキストをジャンル横断的に考察する。より具体的には、類似によってなかば強引に結びつけられてきた言説間の差異を、主題、内容からレトリックのレベルにいたるまで慎重に再点検することで、異人が「他者表象」のメカニズムを経て犯罪と結びつけられるありようを解明することを目的とした。

2-2.

近年のポスト・コロニアル批評は作品の受容史をその対象とする政治的批評として大きな成果をあげてきているが、作品成立時期に絞り込んでそのコンテキストとの共鳴を検証するとき、ともすればその関心対象は、諸テキストが撚り合わされて、ひとつの大きな方向性へと収斂する状況へと向かいがちで

ある。だがそれでは当のテキストが成立したまさにその時点で生じたかもしれない他者についての「驚異（グリーンブラット）」の感覚が読者・観客にあたえたであろうダイナミックな揺さぶりの本質を見失いかねない。本研究の特色は、ある演劇テキストの創作時点での周辺の諸テキストの類似点に着目しつつ、しかしむしろ逆にレトリックのレベルに至る子細な差異を精査することによって、旧来の歴史主義や新歴史主義の読解が（なかば強引に）誘導してきた還元主義的な作品受容のありかたを再点検し、必要なら異議を唱えることを目標とすることにある。たとえばオセローの「黒さ」に中世道徳劇のアレゴリカルな反映を読み込む読解が 1607 年 St. Paul's での R. Wilkinson の説教をコンテキストとして請来するとき、検証されるべきは 1603 or 4 と言われるシェイクスピアのこの劇が逆に説教に影響している可能性でなければならない。そのとき、『オセロー』はムーア人という記号をはるかに流動的なものとして、読者・観客に提示するだろう。敷衍すれば、それは現在に連なる作品の解釈史、ひいては西洋の異人観にまつわるモラルの再点検へと発展する可能性を内在している。

2-3.

本研究は上述のごとく、新歴史主義の垂流が陥った、民衆文化史（「小さな歴史」「抑圧されし者たちの声無き声」）の大きな支配的言説への安易な迎合を批判し、かつそれを受容史へと接続することで、異人/他者排除についての近世英国社会の精神風土を検証し、あわせて近世初期の演劇テキストを、こんにちに至る解釈のバイアスから解放することを試みた。付言すれば、それは異人に対する暴力と無理解の出自を考察することを目指すオリエンタリズム批判の傍証ともなるべき政治的批評でもあった。

3. 研究の方法

これまでの研究において蓄積してきたデータのなかで、領域的に不足していたのは宗教的文献（説教文学、宗教パンフレット、および聖書とその周辺）の蓄積と精査である。本課題での研究初年度は、これら世俗的意図とはある程度の距離において、明確な宗教的意図をもって書かれたようにみえる文献の収集と調査をまず行うこととした。具体的には英国国教会とカトリシズム双方の陣営が互いを差異化するために張った論陣において、聖書がどう領有されているか、その際の言い換え、解釈におけるレトリックの揺らぎを可能な限り克明・かつ詳細に分析した。*King James Version* の成立はこの関心の中心にあった。かつて Anthony Burgess が Psalm の一節を分析し、“tremble” から

“shake”への書き換えにシェイクスピアの関与をみたエピソードがあるが、本研究も電子データと全文検索システムの利用により、そうした微細な語のレベルの置き換え、語同士の呼応、さらにはコンテキストを背景にした語のニュアンスの変遷にいたるまで、広範なデータ領域を可能な限り微細に探求する手法を模索した

他方、これまで構築してきた文字情報のデータベースから得られた知見を検証する過程で決定的に不足していたのが挿絵などの非言語情報のコンテキストである。多くのパンフレットや Streets-side ballads には、その内容に呼応して（しばしば大げさな）表紙の図版が添えられているが、文学研究者によるこれら図版の研究・解釈は、その手法においても洗練され、体系化されていると言いが難い。販売部数を伸ばすためだけに、無関係な図版が使われたパンフレットも多い反面、時に重要な意味作用をはたす図版もまた存在する。一例をあげれば 1579 年出版の E. スペンサーの *The Shepherdes Calender* の各月の詩の冒頭にそれぞれつけられた木版画は、P. E. McLane (1961)によれば、女王の結婚問題にまつわる、それゆえに政治的に危険なメッセージを内包していることになるが、それが事実であるとすれば詩の読解は図版から多大な影響を受けることになる。要するに、図版は本文の忠実な図象化とはかぎらないが、他方むしろ潜在的にアイロニーとして機能する可能性すらあるということなのである。してみれば、当時の図版を読み解くいわば「絵画の文法」の研究も、新たに要請される重要な課題となる。それゆえ既存のデータベースにはあらたに画像のフィールドが加えられることになった。検索のタグをどう有効に機能させるかという問題が残った。

上記の研究方法によって、初年度は宗教的言説における異人の表象を多角的に検討することから開始した。ここでいう「異人」は単に異教徒にとどまらない。英国の近世が国教会の成立と不可分である以上、その宗教の本質において、アイデンティティの確率は緊急性を要する重大な関心事であったはずで、そうした「困り込み」には必然的に他者の排除が伴う。カテキズムのイデオロギー性ともいべきものが、研究対象となった。以下、成果について述べる

4. 研究成果

研究初年度は、「異人」の再定義のための一次資料の渉猟を広く行った。具体的には東京大学所蔵の Early English Books Online によって、近世初期英国社会における「他者」像の分析をしたが、とりわけパンフレットにおける「狂気」の社会への攪乱要素としての

記述が犯罪の表象と密接に結びついた例を多数取材することができた。その際、単に説話の伝統や表象の形式に由来する類似のみならず、たとえば同一の出版業者が所有する木版画を使い回すことによる、イメージの流通・共有化といったきわめて興味深いケースも散見された。シェイクスピアの『リア王』中、エドガーによる「ベドラムのトム」への変装が描かれるが、これはたとえばトマス・デカーのパンフレット *Bellman of London* の表紙の木版ときわめて高い近接性を示す。このことから『リア王』の Q1 テキストを大衆劇場でのスペクタクル性をより重視した作品として再評価できる可能性を指摘した。

罪の意識を外在化することを試みる精神構造は、同時代の宗教的文献にも色濃く表れている。たとえば John Donne の *Devotions upon Emergent Occasions* には、正体を特定できない病魔との闘病生活が祈りへと展開する課程において、現員の外在化・内在化の二極分化が試みられる。もちろんここでの「罪」は神との関係性における罪(Sin)であるけれども、世俗文献における「罪」(人間相互の関係性における(crime))を共同体の「外部」に定位しようとするところみと共振しつつ、宗教改革の言説とも呼応する可能性が確認された。

18年度は(1)宗教的文献における「異端」断罪の言説における排除の言説の類型をたどり、(2)世俗パンフレットにおける共同体の「外部」および「他者」の発見と定位の言説を、平成13年度～16年度科学研究費補助金(課題番号13610547)にもとづいて作成中のデータベースに探り、相互の共鳴の可能性を、文体、論理構築の双方から考察した。英国国教会とカトリック、ピューリタンの三つ巴の相互排除の論理は同一のレトリックの効果的な援用と反復によるパロディの効果がかきわめて興味深く、世俗的な文献における同種の「他者の定位/しかるのちの排除」の構図との修辭的共鳴の実例をいくつか発見した。他方、トマス・ミドルトンの演劇とパンフレットに、同時代の宗教的文献における penitence のレトリックの援用が濃厚であることを確認でき、先行研究との整合性を検証した。記号'courtesan'の民衆文化史と文学史にまたがる射程での再定義を試みた。

19年度は主として16～17世紀演劇における異人、とりわけユダヤ人表象とムーア人表象について研究を行った。P. Massinger の *A New Way to Pay an Old Debt* においては、ユダヤ人の金融業者 Overreach と Shakespeare の *Merchant of Venice* の Shylock との比較において、ユダヤ的旧約的価値観が、じつは当時の社会に急速に広がり始めていた「資本主義・市場経済」のモラルを反映しつつも、喜劇の大団円では否定され

る価値として描かれていることに着目。これを出し抜こうとする「新手の手法」と呼ばれるものが、その道徳的価値判断の準拠枠として、むしろ古風な、「贈与、奉仕」というモラルに依拠するというアナクロニズムに支えられていることに気づいた。市場の冷徹な論理の浸透する社会が、喜劇においてそれを乗り越えるために、贈与のモラルへと回帰する現象の背景に、anti-Semitism の主題を読み込むことができそうとの感触を得た。

一連の都市喜劇研究の成果の一部は、研究代表者がコーディネータをつとめた第46回シェイクスピア学会（於、早稲田大学）の公開セミナー2『ミドルトン-マナー・セックス・ゲームの劇空間』でも発表した。また、上記、「贈与、奉仕」の具体的実践形態としての家父長制が、資本の論理とせめぎあう場での封建制のゆがみの象徴として、資本化される性とそのエージェントとしての私生児という記号のもつ演劇的意味について考察し、論文にまとめた。

20年度はこれまでの研究のまとめとして、宗教関連の言説における異教徒排除の言説について、構築してきたデータベースから3ないし4つの点に絞り込んだレトリック上の類型と、主として1600年代以降の世俗言説、なかんずくパンフレットや演劇作品に頻出する同様の表現との突き合わせの作業から、同時代の異人排除の精神史を形成する言語実践のありようを考察した。

宗教改革という歴史的文脈において、もっとも強い「近親憎悪」的な対抗言説として現れる、攻撃的なレトリックは、カトリック vs. プロテスタントなどという安易な図式化をうけつけないほど、相互に依存しあう構造をもっているが、それがユダヤ人排除の言説やイスラム排除の言説と、レトリックのレベルでどう響きあうかといった問題についても、ある程度の視座を得ることができつつある。

犯罪者の表象は、世俗パンフレットにおいて顕著であるけれども、いわゆる pedler's French の紹介などの言説が、travel plays にみられるような異国趣味を援用しつつ、コミュニティの「外部的存在」として描き尽くされることによって逆説的に内在化されるメカニズムについても、宗教言説における他者の表象のレトリックが援用される状況についても、ジャーゴンの共有のレベルから挿話の援用のレベルまで、密接に共振する説話構造を検証しつつあり、今後のさらなる研究のてがかりとしたいとかがえている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1. 境野直樹. ミドルトン劇における契約・誓約・ロアリング 『岩手大学英語教育論集』11, 129-150, 2009年 査読無

2. 境野直樹. 私生児の覚醒-『復讐者の悲劇』と虚構化される近代 『岩手大学英語教育論集』10, 89-100, 2008年 査読無

3. 境野直樹, 平田満男, 原英一, 小澤博, 岩田美喜「ミドルトン-セックス・マナー・ゲームの劇空間」SHAKESPEARE NEWS 47, (2), 23-27 2007年 査読有

4. 境野直樹. He knows not what he sees / saies -Q1 *Lear* の復権のために 『岩手大学英語教育論集』8, 47-65, 2006年 査読無

〔学会発表〕（計 1 件）

1. 境野直樹（セミナーリーダー）, 平田満男, 原英一, 小澤博, 岩田美喜 「ミドルトン-セックス・マナー・ゲームの劇空間」第46回シェイクスピア学会公開セミナー2, 2007年10月11日 早稲田大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

境野直樹 (SAKAINO NAOKI)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号: 90187005